



ワールド・スーパーノヴェルズ

スクのかげに

skerat brott

ヘーグストランド 高見浩訳



ワールト・スーパーノヴェルス

マスクのかげに **Maskerat brott**

オッレ・ヘーグストラント 高見浩訳

マスクのかげに

定価 980円

昭和52年 9 月30日 第1刷発行

著 者 オッレ・ヘーグストランド

訳 者 高 見 浩

発行所 TBS 出版会
東京都港区赤坂5丁目3-50
株式会社 TBSサービス内

印刷所 三和印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

発売元 株式会社 産 学 社

東京都千代田区富士見 1-11-23 フジミビ
郵便番号 102・電話 東京 (03) 261-3393
振替口座 東京 79840番

0097-1031-2733

© 高見 浩 1977 Printed in Japan

少女

「ねえ、パパはいつ帰ってくるの？」少女はたずねた。

新聞を読んでいた住み込みの女家庭教師が、うるさそうに顔をあげた。

「いい加減になさい。クリスティーナ。お父様は遠くに出かけていて明日にならないと帰ってこないことは知ってるでしょうに」

「どうしてうちのパパはいつも家にいないの？」少女は再びたずねた。「ペーターやヨーハンのパパは毎晩帰ってくるのに」

「あなたのお父様はお仕事の都合上、どうしてもたくさん旅をしなくちゃならないんです。いまはアメリカに行ってるのよ、わかってるわね」

少女はクレヨンを取りあげた。ぬり絵の中の豚の絵の上から青い太い線を真っすぐ引き、引き終ると今度は黄色いクレヨンに持ちかえて同じような線を引く。

「どうしてそんなことをするの？」家庭教師はたずねた。「豚さんは黄色と青で描くんじゃなかったでしょう」

「あたしは好きなように描くんですもん」少女は口をとがらせた。

「いつもそうなのね、あなたは」家庭教師は吐息をついた。「そろそろ夕食のお時間だわ。コーンフランクがいい？」

「ええ。でも、お砂糖をまぶしたやつじゃなくちゃいや」

腰をあげた家庭教師はオーヴンの上の食器棚の前に立ち、コーンフレークの箱を取りだしてテーブルに置いた。

「ねえ、犬の玩具入ってる、そこに？」

「いいえ、あれはこの間取りでしたでしょう。それに、コーンフレークの箱に玩具のおまけを入れるなんて馬鹿のすることだわ。小ちゃな子供たちが口に入れて、うっかり嚥み込まないとも限らないでしょう」

「そうしたら死んじゃう？」

「そのまま取りだせなかったらね」

「じゃ、ママみたい」あっけらかんとした顔で少女は言った。

「そうね、お母さまはもうこの世にいないわ。でも、喉に何かがつつかかって亡くなったんじゃないことよ」

少女は一言も返さずに親指をしゃぶった。家庭教師はボウルを取りだしてミルクを注ぎ、箱からつまみだしたコーンフレークをその上にふりかけた。

「どうしてそういう風にするの、アニカ？」

「どうしてって？」

「だって箱の中に手をつっこむじゃない。パパはいつも箱を持って、パッパッてふりかけてたわよ」アニカはそれには答えずに、高いスツールをテーブルの前に引き寄せた。

「あたし、よだれかけはイヤ」

「いいわよ、かけなくても。その代りみんな残さないで食べてね」

少女はおとなしくコーンフレークを食べはじめた。むさぼるように食べながら、ときどきスプーンを休めてはコーンフレークをギューッとミルクの底に押しつける。

「何をしているの？　ダメよ、食べ物で玩具にしては」

「玩具になんかしてないもん」

「じゃあ何をしているの？」

「しーらない」

少女は自分が何をしているのか、はっきり心得ていた。彼女は、さっき、玩具が喉につっかかると言ったアニカの言葉を思い出していたのだ。コーンフレークだって喉につっかかったら死んじゃうかもしれない。でも、ミルクにたっぷり浸しとけばすんなり喉を通るんじゃないかしら。

「ねえ、今度ババ、アメリカからお土産を買ってきてくれるかしら？」

「きつと買ってきてくださるわ。いつもそうでしょう」

「でも、こないだアイスランドで買ってきてくれた北極熊は嫌い。とっても怖い顔してるんですもの」

「今度はきつと、インディアンのお人形を買ってきてくださるわよ」

「インディアンで、おっかないの？」

「とんでもない、おっかないことなんてあるものですか」

「でもペーターとヨーハンはそう言ってたわ。インディアンは人を殺すんですって」

「それはインディアンごっこをするときの話ですよ。さあ、早く食べないとお風呂に入る時間がなくなるわよ」

「ベッドに入ったらお話を読んでくれる？」

「ええ、短かいのをね」

「じゃあ、『クッキーを焼くマシアス』がいいな。最初は七個あったのに、いまは六個。犬がやってきて一つ食べてしまったんだ、とマシアスは言いました」

「もうすっかりそれで言えるんじゃないの、そのお話は」

「でも、マシアスのお話じゃなくちゃイヤ」

クリスティーナがお風呂に入った後で、アニカはそのお話を読んでやった。それから少女を寝かしつけ、毛布を一枚与えと、少女は親指をしゃぶりながらそれにしがみつく。

「廊下の電気をつけて、ドアは開けておいてね」

「ええ、そうしておくわ。わたしは台所でお皿を洗っていますからね。おやすみなさい」

「パパの代わりにおやすみの抱っこをしてくれないの？」

「もちろん、してあげますとも」

おやすみの抱っこをしてもらうと、少女はすぐ寝返りをうってうつ伏せになった。二分もしないうちに、ぐっすりと寝入っていた。

じっさい、クリスティーナ・スンデリンはどこにでもいる、ごく当り前の少女だった——ただ、父親が妻を亡くした中年の男性であり、しかもスウェーデンの首相であるという点だけが、変っているといえはいえたのだが。

父親

ベント・スンデリンは、シカゴのさるホテルの一室にいた。報道担当秘書官と一人の新聞記者が一緒だった。その日の目中、彼はスウェーデン産業界の利益を代表して中西部諸州を巡訪する旅を了えたところだった。

「今度の首尾は何点くらいかな？」首相はたずねた。

「諸般の情勢を考慮に入れば、満点に近いんじゃないでしょうか」報道担当秘書官が答えた（彼は破産に瀕したさる地方紙の記者をやっていたところをスンデリンに引き抜かれた男だった）

「きみはどう思う、ペール？」スンデリンはもう一人の男、長身で眼鏡をかけた浅黒い顔の新聞記者にたずねた。淡い茶色のスーツに身を包んだその男は、ひびの入った縁をテープで貼り合わせた眼鏡を、チョコンと鼻にのせていた。嗅ぎタバコのケースをおもむろにポケットから取りだすと、彼はかなりの量をつまんで上唇の下に押し当てた。

それから秘書官のほうを見て、

「スコッチはまだ残っているかな？」

秘書官は急いで壺を持つと、グラスに半分ほど注ぎ込んだ。ペール・ルンドは一気にそれを飲み干した。

「うまい」

「きみはどう思うか、と訊いてるんだがね」首相は答を促した。ルンドはスンデリンの顔に視線を転じた。厚い眼鏡のレンズのおかげで、茶色の目が実物以上に大きく見える。その風貌にはどこかしら知恵遅れの子供めいた印象がつきまといていた。ジャーナリストとしての彼の仕事にとって貴重な財産ともいふべき素朴な稚気は、ある程度まで生来のものだったのである。もちろん、あくまでもそれは、「ある程度」の域を出ないのだが。

「怒ってましたか、国務長官は？」彼は反対に首相に訊き返した。

「国の外交を執る者は、そう簡単には腹を立てんものさ、ペール。深甚なる不満の意を表するくらいが関の山だね」

「新しい大使をストックホルムに赴任させるといふような話は出ましたかね？」

「いや、直接には出なかった。匂わせはしたけれども」

「書いていいですか、そいつを？」

「かまわんよ、わたしの名前さえ出してくれなければ」

ルンドは突然、一言の断わりもなく立ちあがって部屋を出ていった。話の途中で飛びだしていくのは、彼の持ち前の癖だった。スンデリンはそんな彼を前にも見ているから、特別な反応も示さなかったが、秘書官のほうは、いささか度肝を抜かれたような顔をしている。

「彼はああいう男なんだ」スンデリンは言った。「あまり気にしないほうがいい。ああ見えてあの男は、スウェーデンでいちばん情報通の政治記者だからな。いい面だけを見てればいいのさ」

スンデリンは五十の坂を越えていた。いくぶん太り気味だが、動作は驚くほど敏捷だった。とはいへ、かつては黒々としていた髪にも、近頃は白いものがチラホラまじっている。必らずしも理想主義者というタイプではないが、周囲の状況に即応する柔軟さには余人を寄せつけないものがあつたし、情報という情報を手当りしだいにのみ込もうとする貧婪さにも定評があつた。

「わたしはもう少し英語が上手くならんといかん」彼は言った。「もちろん、いまのままで自分言いたいことは表現できるし、細かいニュアンスも何とか伝えられるが、とかく冗漫になっていかん」

「ほくはそうは思いませんがね」秘書官は異を唱えた。

「きみは阿呆じゃないかと思うことがときどきあるぞ」スンデリンはきめつけた。「語学がわたしの得手^えじゃないことは、とくに承知しているんじゃないか」

秘書は何も言わなかったが、その顔には深く傷つけられた表情がよぎった。がっくりと肩をすぼめたその背丈は、二インチほど縮んだかに見えた。

「そうまともに受け取らんでもいいさ。きみはまだ現職について日が浅いんだ。わたしが卒直^{さつちく}な性で、相手にもそれを求める人間だということを知らなかったとしても、無理はない」

しばらく沈黙がつづいた。スンデリンはスコッチをワン・ショット注いで、何か考え込みながらすすった。

「アメリカ大使の車に手榴弾を投げ込むような男は、いったいどんな手合いだと思ふね？」

「精神に異常をきたしていたとは思えませんが、いかがでしょう？」

「ああ、それが連中の見解なんだが。公安部の連中は徹底的に彼を取り調べたらしい。もともと興奮しやすいタイプの人間だったらしいね。もちろんマルキシストで、これまでもさまざまな抗議運動に参加してきたらしいが。ただ、あれ以前に暴力的傾向を示したことは皆無だというし、診断にあたった医師連も、彼をあんな行動に駆りたてた直接の原因はわからんと言ってるようだ」

「しかし、何らかの動機はあったはずですよ」

「そりゃまあそうだろうが、どうも釈然としないものが残る」

「麻薬の影響下にあったんじゃありませんか、LSDとかそんな類^{たぐい}の」

「セボもその線を調べてみたんだ。結果は、彼が麻薬常習者であることを示す証拠はゼロとでた」

「さっきルンドにおっしゃったことは本当ですか？ 国務長官が新大使の任命を示唆したとかいう？」

「いや、あれはちょっと観測気球をあげてみたまでの話さ。アメリカ側がどう反応するか甚だ興味があ
るんでね。とにかく、早いところ国に帰って人間らしさを取り戻したいものだ」

報道担当秘書官は、思い切ってたずねた。

「首相ご自身は、今度の旅の成果をどう見てらっしゃいますか？」

「上々の首尾を収めたと見ているがね。これといったデモにも会わなかったし、今度の大使の殺害事件を国務長官は偶発的な事件とみなしているという確信を持ったよ。それに比べれば、貿易使節団の首尾など微々たる問題にすぎんさ。大企業は有能な人間を大勢抱えている。わたしの力添えなどなくても、商品の売り込みに支障を来すことはないだろう。それにしても、国務長官との会見が実現できたのは幸運だったな。あれは大成功だった」

「今度はいよいよ総選挙ですね」

「それそれ。いよいよ総選挙だ。今度は安閑としておれんぞ。選挙民の関心も低調だというし」

ふっと、あることがスンデリンの顔に浮かんた。少なくとも選挙が済むまで家にいてもらうようアニカに頼まなければならぬことを、思いだしたのだ。そのことを考えているうちに、娘の顔が浮かんた。「いかん」彼は口に出して言った。「すっかり忘れていた」

「何をです？」

「クリスティーナにお土産を買ってやらなければならぬ。このままじゃ、玄関を入れんよ」

「何か見つくるってきましょか？」

「いやいや、わたしが行ってくるからいい」

彼は立ちあがり、コートをはおって廊下に出た。二人の特別護衛官がさっと椅子を立った。

「娘の土産を買いに、ロビーに行ってくる。きみたちはここにいてくれないか」

二人の護衛官は顔を見合わせた。

「いえ、そういうわけにはいきません」一人が言った。「命令違反になりますからね」

その男が背広のボタンをはめるとき、ショルダー・ホルスターがチラッと覗いた。三人は連れ立ってエレベーターに乗ると、二十三階降下して一階に着いた。

ロビーは人でごった返っていた。スンデリンに気づく者はいなかったが、フロントの前に立って精算していた二人のスウェーデン紙の記者だけは別だった。放っておいてくれるといいのだが、と思いつつスンデリンは彼らに手をふった。その二人のうち、スウェーデンの有力夕刊紙のアメリカ駐在記者のほうは、かねてから虫の好かない人物だった。無責任だし、なお悪いことに愚鈍なのだ。スンデリン首相の思い付く最悪の人間は愚鈍な人間なのである。もちろん、自由党の黨員たちはさて措いての話であるが。

スンデリンはズラッと並んでいる店の一つに入ってしまった。あれこれ品定めしているうちに、人形が沢山入っている棚の前きた。結局買い求めたのは、インディアン少年の格好をした人形だった。値

段は八ドル。

そこへ、例の夕刊紙の記者が近寄ってきた。

「お嬢さんへのお土産ですわね？」

「そうなんだ」スンデリンはくだけた口調で答えた。その男に対する反感は、まだ一度も面に出したことがない。見事なまでに自己中心的なその記者は、当然のことながら、自分が首相に嫌われていようなどとは夢にも思っていなかった。

「いくつですか、お嬢さんは？」

「四つなんだ。この十二月には五つになるんだがね」

明日の記事の見出しが早くも見えるような気が、スンデリンはした。一年前に妻を失ってからというもの、子持ちの男やめめという彼の境遇は、安手の夕刊紙や婦人雑誌の取材意欲を刺激してやまなかったのだ。

「お人形と遊ぶのが好きなんですわね、お嬢さんは？」記者はたずねた。

「女の子はみんなそうだろう」

記者のほうでは、読者——と編集長——が読みたがっているものを、ちゃんと心得ていた。

「そのうちお嬢さんのところにも、新しいママがくるんでしょうね？」

「さあ、どうかね」スンデリンは答えた。「このわたしの歳で、いまさら再婚でもあるまい。きみも今夜われわれと同じ便でストックホルムに戻るのかね？」

「いえ、わたしはニューヨークに戻ります」

良かった、とスンデリンは思った。が、口では、「そいつは残念だね。さてと、これから部屋に戻って荷造りしなきゃならん。今夜会えないなら、ここで、さようならを言っておこう」

人形の包みを小脇に、二人の護衛官を従えてスンデリンは自分の部屋に戻った。部屋に入ったとた

ん、こんな大きい人形を買ってしまったことを後悔した。もちろん、随員の一人に持たせようと思えばできないこともないが、そういう形で自分の地位を利用したくはない。

彼は時計をながめた。午後六時になるところだった。ストックホルム郊外のストゥレビーにある自宅では、深夜を迎えていることだろう。娘の寝顔を思い浮かべると、自然に笑みがこぼれた。

自分の家に戻る気持はいいものだ、と思いながら、随員の一人を電話で呼び寄せる。人形はその男に預けておこう。

「きみの高給に見合う仕事を一つ、お願いしたい」現われた青年に言って、人形の包みを手渡した。「アーランダに着いたら、忘れずに返してくれよ」

スヴェン・B・エング補佐官補は、大学卒業と同時に党に拾いあげられた金髪の青年だった。実に有能で、礼儀正しく、自分の昇進に寄せる関心は並々ならぬものがあった。

「他に何か用事がありますか？」彼は首相にたずねた。

「いや、それくらいだな。とにかく、忘れ物がないように配慮を頼む。空港までは、総領事が車で送ってくれるそうさ。彼の名も感謝状のリストに載せておいてもらおうか」

うなずいたエングの顔には、かすかな苛ら立ちの色が浮かんでいた。それくらいのことならわざわざ注意されなくても覚えているのに、と言いたい気持を彼はぐっと押え込んだ。ところでスンデリンは、相手の気持の動きを直観的に読み取る能力を備えている。太い眉をあげて、彼は補佐官補に言った。

「細かいことに口を出しすぎると思っているんだろうが、それがわたしの性分だね。万事遺漏がないようにせんと気がすまない性なんだ。以前は百パーセント自分の記憶に頼ったものだが、この頃はそうもいかない」

象牙色の電話の一つが不意に鳴った。エングが出た。二言三言相手と話してから、
「総領事からでした。三十分後に見えるそうです」

再び電話が鳴った。こんどもエングが出た。送話口を手で押えながら、彼は首相に渡した。

「外務大臣です」

「どこの国の？」

「失礼しました。われわれのです。エリクソン外務大臣です」

スンデリンは微笑した。

「やあ、イヨーテ」

グスタフ・アドルフ広場の隣のアーヴフルステンス宮殿にある外務大臣室から、大西洋とアメリカ大陸の半ばをまたいで、エリクソンの砂を含んだような声が伝わってきた。

「さっきのニュースで聞いたんだが、『近い将来』アメリカ側が新大使を任命する可能性があるそうじゃないか」

「いや、わたしは一言も聞いておらんぞ、そんなことは。きっとあれだろう、ルンドあたりが小耳にはさんだ噂を流したんじゃないのかね」

「記者連には何と答えたらいもんだろう？」と外務大臣。

「真実を話すがいい——そんなことは関知しておらん、とね」

二人の大臣の会話はなおも数分間つづいた。スンデリンの顔に、しだいに退屈そうな表情が浮かびはじめた。

「じゃあ、これで切らしてもらうぞ。空港に向かう時間なのでね。わたしが着くまで、万事静観してくれたまえ」

会話はそれで終わった。含み笑いを洩らしながら受話器をとると、首相はベール・ルンドの部屋になくよう交換手に頼んだ。が、嗅ぎタバコ好きのジャーナリストは、すでに空港に向かった後だという。

まだ部屋に居残っていた補佐官補は、首相の上機嫌の理由をぜひとも知りたいものだと思った。さして待つこともなく、彼はその理由を知った。

「実は二時間前に、ルンドに話したのさ」首相のほうから、そう教えてくれたのだ。「新大使の任命が近い、そうアメリカの国務長官がわたしに匂わせた、とね。そのニュースがもうイヨ一テに伝わってるんだ。彼は狂喜していたよ」

「本当に新大使がストックホルムに着任するんですか？」

「なに、わたしがわざと観測氣球をあげてみたのさ。アメリカ側がどう反応するか甚だ興味がある。が、わたしの個人的見解を言えば、そう、少なくともあと三カ月待たなければ、新大使着任の地ならしはできんだろうな」

その後空港に着いたさい、スンデリンは出発ラウンジのバーでスコッチのグラスを傾けているルンドの姿に気づいた。

「驚いたよ、きみの早業には」首相は話しかけた。「新大使に関するきみのニュースが、もうラジオに流れているそうだ」

ルンドはにやっと笑った。その拍子にや、で茶色に汚れた歯がこぼれ出て、まるまると肥えたるさぎのような顔になった。

「毎度のことですよ、早業は。そうだ、あなたのコメントをとれ、と本社から指令を受けたんですがね」

「ノー・コメントだな」

「やっぱりね」

ストックホルム行きの便の場内アナウンスが流れた。スンデリンは機に乗り込んで、ファースト・クラスのシートに落ち着いた。二分後には眠りに落ち、飲みものの注文をとりきたスチュワーデスに起

されるまで、ぐっすり眠りつづけた。

またたくうちに食事をたいらげて、ワインを二杯飲む。飲み終わると注意深く歯をせせってから、服の前をはたいた。

「眠ったら起こさないでくれ。自然に目をさますから」

ストックホルムが暁に目ざめようとしているとき、大型機は朝日を目ざして一路東に飛んだ。スウェーデンの首相は夢も見ずに眠っていた。

ト リ オ 三人組

デーベルンスガータンは、ストックホルムのダウンタウンにある通りである。その一面に立つアパートの、モダンな三部屋から成る家に三人の人物——男二人に女一人——が坐っていた。男の一人は三代で、粋な服装をしていた。ふさふさした黒髪はよく手入れされているし、左手の小指にはずっしりした金の印台の指輪をはめていた。

もう一人の男はそれより年配だった。茶色いズボンに灰色がかったジャンパー。みるからに屈強そうな面立ちで、白いもののまじっている髪を短かく刈っている。いまはキー・ホルダーをいじくっていた。

彼ら二人と比べると、女はかなり若い。せいぜい二十というところだろう。贅肉のない引き締まった体つき。艶のある灰色の髪。白いスラックスに同じく白いセーターを着ている。いくぶんアルコールが入っているらしい。神経質そうに、スパスパとタバコを吸っていた。

「今日ぐらい素面でいたらどうなんだ」伊達男がびしりと言った。

「だって、十一時まで働らいていたのよ、今夜は。最後の客がウォッカの壺をさげてきたもんだから、

二、三杯飲んじやったのよ」

「そいつは言い訳にやならん。お前に酔っ払っていられたんじゃ、全部オシヤカになっちまうかもしれねえんだぜ。それぐらいわからねえのか、え、このスベタ」

「そのくらいでやめとけ、アーネ」年上の男が制した。「いまさら怒鳴りつけたところで、はじまらんだろう」

「そりやそうだろうけど、こいつのおかげでせっかくの計画が水の泡になったら、たまったもんじゃねえからな」

しばらく沈黙がつづいた。みな黙りこくっている。女は床をにらみつけていた。

「トイレにいった、水で顔を洗ってこい」アーネという男が言った。

女は部屋の真中の長椅子から腰をあげて、姿を消した。

「まったく、女って野郎は！」

吐き捨てるように伊達男が言うのと、

「あの女を引き込んだのは、おまえじゃないか」年上の男が言った。

「ああ。悔やんでも悔やみ足らねえ失敗、ってやつさ。しかし、素面のときのやつは、あれでけっこう頭も切れるんだぜ」

「残念だな。素面のときがたまにしかなくて」

イングマリが部屋に戻ってきた。泣いていたらしい。年上の男を恥ずかしそうに見て、

「タバコ持ってる、ブッセ？」

男が火をつけたタバコを手渡すと、彼女は二、三度深々と吸い込んだ。

「あなたの言う通りだわ、アーネ。あたし、氣持が昂ぶっているの。でも、信頼してくれて大丈夫よ、絶対に」